

東京の教育

復刊第七号

東京都教師会発行

(事務局) 横浜市都筑区茅ヶ崎南四ノ十四ノ一ノ三二〇

山鹿素行

—三百三十三回忌の意味するところ—

佐藤 健 二

昨年九月二十六日、山鹿素行の菩提寺である牛込宗参寺で三百三十三回忌の法要が執り行はれた。当日は山鹿家本家御夫妻を初めとして、素行會会員二十数名の列席のもと法要が厳肅に営まれ、列席者全員の焼香の後に山鹿家当主からの御挨拶があり、その後、陸軍大将乃木希典がかつて素行靈前に奉じた祭文が読み上げられた。

今、山鹿素行と言つても知る者は少ない。せいぜい忠臣蔵で赤穂浪士討ち入りの時の太鼓が山鹿流陣太鼓ではなかつたかと反応するくらいである。

知る者が少ないのも無理が無い。手もとにある高校教科書『最新日本史』(明成社)を見ても、山鹿素行については「儒学の発達」といふ項目に次のやうな紹介が載せてあるだけである。

〔宋・明の儒学の説を退け、孔子・孟子の原典に返るべきことを主張する古学派が生まれた。山鹿素行は、治国平天下を実行するのが聖人の道であり、これを学ぶのが聖学であるとして、礼に基づく士道論を説いた。〕

ここから伝はることは、宋・明の儒学の説、つまり当時江戸幕府の指導理念として絶対的權威を持つてゐた朱子学を却け、直接孔孟の原点に学ぶといふ聖学を主張、それが儒学史の中では古学派と言はれる一つの流派を形成した。またそれに基づく士道を説いたといふことである。古学派に属する儒学者としては、

むしろ伊藤仁斎や荻生徂徠の方が名高いだろうが、それは素行が儒者としてより、兵学者として世に立つたからである。また士道といふ語で、武士道を説いた人物として高名である。しかし、いづれにせよ、武家の時代が終はり、文明開化の時代になると、儒学や兵学はやがて洋学に取つて代はられ、忘れられていくのである。

しかし山鹿素行は、むしろ明治以後にその主著『中朝事實』の名とともに広く国民に知られるやうになつた希有の思想家であつたのだ。冒頭で法要の事を紹介した中に、乃木大将の祭文が読み上げられたと書いた。いつたい乃木大将と山鹿素行とは、どのやうな繋がりがあるのか。それは、その法要を主催した素行會創立の歴史に深く関係してゐる。

乃木希典は長州藩の支藩である長府藩の江戸上屋敷で生を受けた。父は江戸詰の藩士であつたが、事起きて安政五年(一八五八)長

府に戻ることとなり、希典十歳、父と共に長府に移つた。そこで漢学や武道などの修業を始めたのであるが、元治元年(一八六四)十六歳の時に父と対立し、家を飛び出した。徒歩で萩に向かひ、そこで山鹿流兵学者玉木文之進のもとに弟子入りすることになつた。抑も玉木家は乃木家の親戚筋に当たる。文之進は父の許しも得ずに出奔してきた希典を厳しく叱責したのであるが、最後には許して家に住まはせ、農作業の傍ら学問を厳しく指導したのである。

玉木文之進と聞いて吉田松陰の叔父と気づく人は少なくない筈だ。松陰の父杉百合之助の弟であり、玉木家へ養子に入つてゐる。ちなみに百合之助のもう一人の弟大助の養子先が吉田家であり、松陰はこの叔父大助の後を継いで長州藩の山鹿流兵学者師範となつたのである。松陰は吉田家に養子に入つた後も杉家の家族と生活を共にしてゐた。そこで父百合之助から松陰の教育を託されたのが文之進であり、その叔父から徹底的に学問を仕込まれたのである。いかに厳しい指導であつたかは、司馬遼太郎の小説『世に棲む日々』に詳しく描かれ、テレビドラマ化もされたので、今では広く知られるてゐる。

以上からも分かるやうに、玉木文之進を中心に山鹿流兵学思想は吉田松陰と乃木希典に伝へられたのである。松陰と希典とは十九年の年齢差があり、希典が学問を本格的に始めたときには松陰は既にこの世の人ではなかつ

た。松下村塾はもともと文之進により家塾として始められたのであり、その後を継いだのが松陰であるが、それはわづか三年のことでしかなかった。しかしその三年間の師弟の結びつきが、その後の日本の歴史を変へたのであるから、松陰恐るべし。そしてその松陰が先師と呼んで終生尊崇したのが山鹿素行であった。

さて、その乃木希典と素行會の関係であるが、素行會の設立に最も尽力したのが乃木大將であつたと言つても過言ではない。その始まりは、日露戦争後のことであるが、当時桑港総領事であつた柳谷謙太郎は離任の挨拶に時の大統領セオドア・ルーズベルトのもとを訪ねた。その時、ルーズベルトは日本勝利の祝意を述べるとともに、日本が勝利できたのは武士道によると思ふと言つたさうだ。ルーズベルトは新渡戸稲造の『武士道』を読んでをり、武士道に深い関心を持つてゐた。そこで柳谷に、日本において武士道を説いて最も偉い人は誰かと問うたのであるが、柳谷は答へることが出来なかつた。

柳谷は、帰国するとすぐに東京帝国大学の東洋哲学の泰斗井上哲次郎博士を訪ね、それを問うたところ、博士の答へは、それは江戸時代の有名な兵学者であり、赤穂義士たちを訓育した山鹿素行であるといふことであつた。それを聞いた柳谷は、そのやうな立派な人が世に埋もれてゐるのは惜しいことである。是非法要を営みたいと言ふと、博士はそ

れなら山鹿素行を深く尊崇してゐる乃木大將と野村子爵（靖、吉田松陰弟子）に相談したらよからうといふことで、博士自ら仲介の勞をとつた。二人は大変喜び、明治三十九年九月二十六日素行先生の命日に関係者多数集ひ、宗參寺で法要を行つたのである。それ以来、素行會が中心となつて毎年法要を行ひ、昨午が没後三百三十三回忌の法要となつたのである。

山鹿素行は、武士道の大成者であると同時に日本論の先駆者であつた。その著書が『中朝事實』である。その書で素行は日本とはいかなる国であるか、主に『日本書紀』に拠りながら真実の日本について説いたのである。その書に籠められた山鹿素行の思ひは、乃木大將による素行會の結成や該書出版などにより、明治になつて新たな命が吹き込まれ、今でも国体論の名著として、細々とではあるが、大切に読み継がれてゐるのである。

(会員)

二又隧道の教訓

藤井雅和

いま福岡県北九州市の日豊本線城野駅から分岐して大分県日田市の久大本線夜明駅に至る鉄道路線は日田彦山線と言はれてゐる。昨年七月の豪雨によつて一部不通が続いてをり、なりゆきが心配される。

この線は昭和二十年当時は南小倉彦山間し

か開通してをらず、国鉄添田線と言はれてゐた。ただ、その南に線路は建設中で、いくつかの隧道（トンネル）はすでに竣工してゐた。

大東亞戦争末期、小倉市周辺にあつた火薬類を疎開させるべく、この未使用の隧道の中の二又隧道と吉木隧道などをその保管場所に撰んで移し、陸軍省が管理をしてゐた。しかるに、終戦により、火薬類は占領軍に接收され、十一月八日に引き渡された。十二日には占領軍の米軍少尉ユルトン・ユーイングが引き取りに来て、現地を管轄する添田警察署に火薬の焼却処分を言ひ渡した。

警察署は民間の警防団に依頼し、作業を行ふ。ユーイングはまづ、遠方の吉木隧道に行つてそこで火薬に火をつけてみて爆発はしないなどと主張した。次に彦山駅の方に戻つて二又隧道の火薬にも、ユーイング自身か又はユーイングに命令された者が点火した。十五時頃といはれる。ユーイングらは燃焼経過を見届けることがないまま自動車を駆つて歸つて行つた。

見張りに残つた巡查は、隧道入口から「龍の舌」のやうに伸び縮みする炎を見たといふ。

「龍の舌」はやがて太く長くなり、彦山川を越えて対岸の民家を焼いた。火の見る半鐘が鳴らされ、村人が数十人駆けつけ消火作業にあつた。が、昭和二十年十一月十二日十七時十五分過ぎ、二又隧道は大爆発を起こした。隧道を覆つてゐた土砂が半径二キロに飛び散り、落合二又の村は埋まつて百四十五名が死

亡、負傷者百五十名を超える大惨事になったのである。

この爆発で二又隧道は消滅し、跡は切り通しのやうになつて、隧道が穿たれてゐた丸山は二つに分かれてしまつた。

この事故直後に彦山駅に到着予定であつた列車は少年駅員の機転により駅前方で停車して難を逃れたが、この美談さへ忘れられる程の事件であつたのだ。

この惨劇は占領軍の報道規制により中央では一切報道されず、二日後に地元紙が僅かに報道したのみであつた。後に住民の一部から国が訴へられ、一番は国の勝訴、二番と最高裁では(旧)陸軍と警察署の責任」とされ、つまり国が敗訴して確定した。この最終判決は昭和三十一年四月に出てゐる。しかし事件の発生が占領下であつたとはいへ、講和条約発効後のこの決定は著しく理不尽な裁判であるといはざるをえない。

米軍が取つた責任は、事件直後に小倉司令部の米軍中佐ウオッチが菓子を持つて弔問見舞ひに来たことと、ユーイングをかたちばかりに軍法会議にかけたことぐらゐである。しかし軍法会議にかけられたユーイングは「免官降等本国送還」といふ判決で、無傷で帰国してゐる。なほ吉木隧道の火薬はその後四十日にわたつて燃え続けた。以上、佐々木富泰氏の資料による。

実は二又と吉木の二つの隧道内の火薬は、その量や詰め方、隧道の長さに違ひがあつた。

それが為に一方は爆発し、他方はしなかつたのである。しかし、ユーイングはそれを確認することなく火を放つてゐる。これは火薬の取り扱ひに無知の専門外の者の所業である。生半可の知識、即ち素人の考へでなければ、このやうな事態は出来しない。

占領下に進駐してきた米軍人やその他の米人の中には全くの素人が多数ゐた。それがあらう事か、手を振つて我が国を蹂躪した。もう一度言ふが、素人によつてである。九州の山奥での出来事は、その氷山の一角の判りやすい例である。

戦後の教育政策はかうした連中によつて作られたことが知られている。かやうにして憲法や教育制度など、我が国の根幹に関する制度を米国の素人によつていぢられた。その傷跡の深さは二又隧道の惨事にも匹敵する。占領下に作られた制度や条文はすべて見直しをして、改めるものは早急に改めなければならぬ。(会員)

戦前の中学国語の教科書を読む(二)

第二回

爽やかな心(承前) 河野省三

朝日に匂ふ山桜花は、如何にも清らかであり、さうして単純にさつぱりした眺めであり、嫌味とか毒々しいとかいふ所のない、清いみやびな姿であります。そこに私ども日本人としての心の特色が現れてゐるのであり

ます。吾々日本人の祖先は、かういふ心持を明く、淨く、正しく、直き心とも申しまして、道徳の根柢となる心は、こゝにあると信じて居つたのであります。

かゝるさはやかな大和心を本質とする神道は、たゞこのみやびな心を心として、一途にわが皇室を尊び、わが国家を愛して来たのでありますから、神道の信仰が人性の自然に存して居ることは明かであります。神社はわが神道を形に生かした經典でありまして、彼の鳥居といひ、鎮守の森といひ、氏神の御社といひ、何れも皆清らかに簡素といふことを尚んでゐます。そこにお参りいたしますと、私たちの心はおのづからすがすがしいさはやかな気分になつてしまふのであります。殊に五十鈴川の清い流れに、二千年の昔から鎮座まします皇大神宮に詣りますと、何人も西行法師と同じやうに、

なにごとのおはしますかはしらねども

かたじけなさに涙こぼるゝ

といふ感じに打たれるのであります。この何とはなしに感ぜられる尊い心が、即ち日本人の神に対するありのまゝの姿でありまして、最も気品の高い宗教的の情操であります。

明治天皇の御製の中にも、

浅みどり澄みわたりたる大空の

ひろきをおのが心ともがな

といふ御製があります。この気分を持つてゐることが大切な心がけであります。この御詠を拝誦しますと、如何にも清らかにさは

やかな大御心をしのび奉らざるを得ないのであります。

思へばもう十三年の昔になります。私は明治天皇に因み奉る一つの挿話を持つて居ります。それは明治天皇の御一年祭の行はれた時のことでした。ある小さい田舎町の小学校の庭で、町民の遙拝式が行はれました。伏見桃山の方に向つて祭壇を設け、程よく隔つたところに並びました老幼男女は、その町長を代表者として一同桃山の御陵を遙拝したのであります。その式に遅れた町民たちは、いづれも静かに榊葉の立つ祭壇の前に至つて恭しく遙拝しては立去りましたが、その中に年の頃は五十歳ぐらゐの八百屋さんがありました。つゝまじやかに祭壇の前に立つて伏し拝みましたが、懸て徐ろに左の小脇から綺麗に束ねた一束の生薑を取り出しまして、丁寧に祭壇に捧げ置いて、一歩退いて一礼して立去つたのであります。これを目撃した私は、まことに涙ぐましい感にうたれたのであります。

皆さん、吾々日本人の心の底には、かういふ飾り気のない、自然に単純であつて、しかも清らかな大和心が湛へられて居るのであります。私たちはこの心を日々の生活にうつしませて、物を清らかにし心をさはやかにして、偽らざる力強い社会を築いて行きたいものであります。私はこのさはやかな心を基礎とした生活を、常に、快活にして真面目なる態度と申して居りますが、日本人の気分と態度と

は、どこまでも快活にして真面目なる所に一番よく真価を発揮するものであると信じます。(ラヂオ講演集) 「中等新国文巻一」

【教科書所載の脚注 前回分も含む】

河野省三 明治十五年埼玉県に生る。文学博士。国文学者。國學院大學学長。

明治神宮 東京市渋谷区代木に鎮座。官幣大社。明治天皇及び昭憲皇太后を奉祀する。さしのぼる云々の御製 明治四十二年の御作。

神道 神ながらの道。わが国の神を敬する道。

本居宣長 号は鈴廼屋。伊勢松坂の人。享和元年(二四六一)没。年七十二。

五十鈴川 三重県(伊勢国)度会郡。皇大神宮のほとりを流れてゐる川。

西行法師 俗名佐藤義清。出家して諸国を行脚した歌僧。建久元年(一八五〇)没。年七十三。

浅みどり云々の御製 明治三十七年の御作。

伏見桃山 京都市伏見区桃山町。明治天皇御陵の地。

(編集者註) 括弧内の年数は皇紀。

お願い

皆様にはご健勝に新年を御迎へになつたことと存じます。

さて、日本教師会の教育研究大会は下記のやうに本年八月に東京で開催されます。

今年(明治百五十年)にあたります。そこで明治維新以来の我が国の教育を顧みて、その

内容を検証するといふ主題設定を予定してゐます。

平成三十年度は東京都教師会の主管です。準備や当日の運営などについて会員の皆様のご協力をお願いいたします。

【日本教師会第五十八回教育研究大会】

日時

平成30年8月4日(土) 12:00~17:00

8月5日(日) 9:00~12:00

会場

「アルカディア市ヶ谷(私学会館)」

(〒102-0073)

千代田区九段北四の二の二十五

03-3261-9921

研究主題

「明治維新から百五十年

—近代教育の功罪—」

主管

東京都教師会

◎「東京の教育」への会員の皆様のご投稿をお待ちしています。字数は三千字程度以内でお願いします。ただしこれより長いものは数次に分けて掲載することもできます。写真や図版はご相談ください。

事務局アドレス(佐藤)

komasato@juno.ocn.ne.jp